

被災地支援「ともしびプロジェクト」と 学校広報

丹治睦雄 (たんじ・むつお)

伊達市教育委員会学校教育課教職員指導員

1. はじめに

かつて学校のホームページの意義や役割を深く吟味しないまま、ホームページを立ち上げることが目的と曲解されるような時代があった。ホームページ作成の研修会も数多く開かれ、学校の代表者が作成のスキルを学んで、各学校からはタケノコのようにホームページが立ち上がっていった。しかし、担当者の人事異動や、年々進む校務の多忙化のなかで作成にかかる膨大な時間と労力が重くのしかかり、次第に学校ホームページは下火となっていった。

学校のホームページの意義は、学校広報の考え方を借りれば、学校と学校関係者との間で十分理解し合い、有効な協力関係を作り出すための方法・手段ということになる。また、学校経営の視点からすると、学校の運営状況の情報公開を通して開かれた学校づくりのためのデジタルツールとも考えられる。

その学校ホームページの目的を深く再確認する事態が起きた。千年に一度と言われる東日本大震災である。大津波とその後の福島第一原発事故で、東日本の太平洋沿岸は未曾有の大災害に見舞われた。福島県の中通り地方に位置する学校は、津波の被害に遭うことはなかったが、放射性物質の大量飛散による放射能の不安と恐怖は学校現場を大変な混乱に陥れた。

震災以降、混乱した学校を早期に正常化することが、各学校共通する課題となった。校長として解決する方法を思案するなか、奇しくも国際大学 GLOCOM が中心となって展開する「ともしびプロジェクト」と出会うことになった。本稿では、「ともしびプロジェクト」の支援を受けながら、学校のホームページの積極的運用を通じて、学校の正常化をどのように進めたかについて述べてみたい。



丹治睦雄

2011年3月11日、福島県二本松市立小浜中学校校長時に東日本大震災を罹災。同年8月、震災の影響により4カ月遅れで桑折町立伊達崎小学校に異動。13年4月～15年3月、伊達市立堰本小学校長。15年より現職。

2. 東日本大震災の罹災

2011年3月11日午後2時46分。その日は、当時勤務していた二本松市立小浜中学校の卒業式が午前中に開催され、まだ校舎内には卒業式の感動の余韻が残っていた。卒業式という一大行事を午前中に終え、生徒たちは早めに下校した後のことだった。突然大きな地震に襲われ、学校はまるで起震車で体験するような激しい揺れに長時間見舞われた。忘れようとしても、忘れられない東日本大震災の罹災である。あれから4年9カ月、震災復興のために懸命の努力が続けられているにもかかわらず、いまだ完全復興までの課題は数多く残されている。

3. 伊達崎だんざき小学校での悲しい出来事

当時、東日本大震災で混乱した学校を收拾し正常化を図るために年度末の定期人事異動は4カ月間延期され、8月1日に小浜中学校から桑折町立伊達崎こおり小学校に赴任した。年度途中に赴任した伊達崎小学校は、2010年に福島県「うつくしまグリーンプロジェクト事業」の指定を受け、学校、PTA、地域が協力して校庭の全面芝生化に取り組んだ学校だった。2011年の春の運動会は、芝生の上で開催することを目標にして芝生の生育管理を行っていたが、3.11の東日本大震災で状況は一変した。

福島第一原発事故で降下した放射性物質の除染作業が始まると、校庭一面に生えそろうた芝生が除染の大きな妨げとなってきたのだ。なんとか校庭の線量を下げようと、芝生を限りなく短く刈り上げたり、高圧洗浄機で芝生を洗ったりと、思いつく限りの方法で除染に取り組んだ。しかし、期待したような効果が表れず、放射線量を下げる選択肢は次第に限られていった。万策が尽きたところで、教育

委員会、地域やPTA関係者が一堂に会し、今後の対策を協議した結果、苦渋の決断をするに至った。重機による芝生の剥ぎ取りである。

芝生を剥ぎ取る様子を児童に見せるには、とても忍びなく、児童の心に傷を残してはいけないという教育的な配慮から、作業当日は全校生で遠足を実施した。しかし、遠足から帰って来て、校庭の変わり果てた光景を見た児童の心中を推し量ると今でも胸が締め付けられる思いがする。その結果、校庭の空間線量は10分の1程度に低減することに成功したが、芝生の剥ぎ取りの代償はあまりにも大きかった。

夏休み途中の8月1日に伊達崎小学校に着任したが、夏休みの残りの期間は、これまでの状況を理解して、2学期からの教育課程の確認や学校経営上の課題と

図1 重機による芝生の剥ぎ取り



出所：伊達崎小学校提供

対応策の分析に明け暮れた。

第2学期が始まり、始業式で子どもたちと対面した。人懐っこく明るい子どもたちばかりで、芝生の影響など微塵にも感じられなかったが、子どもたちとの会話で芝生の話になると急に口が重くなり、表情が曇るのがわかった。彼らにとって芝生撤去の記憶は決してよい思い出ではなく、思い出したくない悲しい記憶であることはすぐにわかった。

保護者と話す機会が増えてくると、給食で使用する食材や水道水の安全性、校地内の放射線量の値などへの不安、また屋外での活動時間の制限や教室の窓の開閉への不安を訴える保護者の声を度々耳にするようになった。大多数の保護者は、このような放射能に関する不安を直接学校にぶつけることはなかったが、一部の過敏に反応する保護者や、すべての保護者の胸の中にある漠然とした不安感に対して、どう向き合えばよいのが学校の大きな課題として浮かび上がってきた。

4. ホームページによる学校の見える化の必要性

町当局の徹底した除染や給食の食材や飲料水の放射能検査で、安全性は十分に確保されていることを繰り返し広報しているにもかかわらず、保護者から不安感を払拭できない。東日本大震災の激しい揺れによる家屋の損壊、伊達崎小体育館での緊急避難生活の体験、福島第一原発事故を伝えるテレビ映像で味わった爆発の恐怖の記憶、そして原発周辺の町から大挙して押し寄せる人々の姿など、心の奥底に刻まれた震災の負の記憶は、容易に消せるものではないように思えてきた。

学校は、よく保護者にとってブラックボックスのようなものと言われる。保護者は、子どもたちを朝学校に送り出し、そして子どもたちが夕方帰宅するまでの間、自分の子どもが学校でどんな生活をしているのか、まったくわからないのである。内部構造がよく見えないという意味で、学校は一種のブラックボックスと言えるであろう。また、夜に子どもから聞かされる学校のわずかな情報を頼りに、保護者は想像力を働かせて子どもの話のイメージを膨らませることになる。それは実際と大きなズレが生じていることもあり、時として様々な学校と保護者間のトラブルの原因ともなる。

そこでこの状況を打破するために考えたことは、身近な情報をきめ細かに発信し、学校の「見える化」を進めることである。そのことによって、保護者の不安感を少しでも安心感に変えることができるのではないかと考えた。

当時、学校では、学校・学級通信を週1回から月1回の頻度で発行して教育活動に関する情報開示をしていたが、さらに情報発信の頻度を上げるために、学校ホームページを立ち上げることも考えた。しかし、過去の実験からその作成に要する時間と労力を考えると二の足を踏んでいた。そのような折、学校用CMS（Content Management System）を販売する会社から震災の被災地支援の一環として、ホームページ作成ソフトではなく、ブラウザ上でブログ形式のホームページを作成できるシステムを無料で使用できるという夢のような話が舞い込んだ。

さっそく当該会社に連絡すると、国際大学 GLOCOM が中心となって進める「ともしびプロジェクト」でホームページの運用までの指導を受けられるという耳よりの情報もあり、さっそく国際大学と連絡をとった。

5. ブログ形式の学校ホームページの立ち上げとその効果

同じシステムで学校のホームページを立ち上げている先進校を参考にして、ホームページの構想を練った。特に保護者が抱く不安感を軽減し安心感に変え、学校への信頼感を高めるコンテンツはどうあればよいかについて、熟慮を重ねた。やがて国際大学准教授の豊福晋平氏が唱える学校広報を学ぶことによって、学校の見える化に必要なコンテンツの輪郭が少しずつ見えてきた。

<コンテンツの方針>

学校からの一方通行の情報発信ではなく、**双方向性**という視点を念頭に置き、教職員が発信する**学校ブログ**と児童が発信する**子どもブログ**、読者が投稿する**投稿ブログ**の三つの視点からコンテンツを構想した。

(1) 学校ブログ

- ① 校地内の空間放射線の測定値
- ② 毎日の給食献立
- ③ 児童の学校生活（授業）の様子

(2) 子どもブログ


高学年国語科、総合の授業、児童会 HP 委員会のブログ活動。

(3) 投稿ブログ

メールで読者からの投稿を募り、学校でブログにアップする。

図2 伊達崎小学校ホームページ（当時）

黄色い帽子が好き！！



1年生は、どこに行くにも黄色い帽子をかぶっています。男の子も女の子もです。そのように担任の先生に指導されているのかと思っていました。昼休みに1年生たちが遊んでいる所に行って写真にとりながら、聞いてみました。
 ※右側の写真で体育の紅白帽子をかぶっているのは他の学年の児童です。

「大内先生からいつも黄色の帽子をかぶるように言われているの。」

「そんなこと言われてないよ。黄色の帽子が好きなんだ。」

黄色の帽子が好きという言葉は少し意外でしたが、全員が同じように考えているかと思うと、1年生のかわいい文化のようでとても面白く感じました。

【1年】 2012-09-18 13:40 up!

カテゴリ

- ☐ TOP
- ☐ 校長室より
- ☐ 保健室より
- ☐ 子どもブログ活動
- ☐ 投稿ブログ
- ☐ 本日の給食
- ☐ 行事
- ☐ 1年
- ☐ 2年
- ☐ 3年
- ☐ 4年
- ☐ 5年
- ☐ 6年
- ☐ 児童会
- ☐ P T A

■ 伊達崎校誌

今朝の放射線情報



左側の写真は、今朝8時の放射線モニタリングポストの表示です。0.166 μ Sv/hと低めの線量を維持しています。

右側の写真は、この夏の役目を立派に果たし、来年まで閉鎖中の学校のプールです。いつも子どもたちの元気な歌声が響いていた今年の夏が懐かしいです。昨年使用できなかったので、今年のプールの記憶は一際鮮明です。

【放射線情報】 2012-09-13 11:13 up!

9月11日（火）の放射線情報

検索

検索対象期間
 年度内 すべて

<< 2012年10月 >>

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

学校行事等

- 10/3 町学力向上推進公開（半田磯秀小）
- 10/4 第2回計算大会、スポーツテスト、5年日和くにみ訪問、クラブ活動8
- 10/5 第2回漢字大会
- 10/6 伊達崎幼運動会
- 10/8 【体育の日】

出所：桑折町立伊達崎小学校ホームページ

注：伊達崎小学校ホームページは2013年4月より桑折町教育ポータルに移転。

CMS方式は、ホームページ作成ソフトのように画面構成の自由度はそれほど高くはないが、操作性がとてよく、短時間で作成できるという利点と、簡便さゆえに小学生にも作成できるという長所を兼ね備えていた。

ブログ更新が軌道に乗ってくると、校内巡視や教室訪問する際はブログ用の写真撮影のために、いつもデジカメを携行するようになった。校舎を一巡して、撮影した写真をもとにブログを更新するという具合である。

ホームページを開設当時、1日に1度のブログ更新を目標にしていた。1日のアクセスカウンターが示す値はあまり増加しなかったが、1日のブログの更新の数を少しずつ増やしていくと、アクセス数も次第に増加していった。アクセス数は、ホームページへの関心度、学校に対する親密度のレベルを示す指標ととらえ、このホームページでねらう「学校の見える化」の進捗状況の評価にもつながってきた。1日の更新数を増やすことには限界があるが、更新数とアクセス数の間には、正の相関関係が見られた。

また、学校評価として保護者対象のアンケート調査を実施しているが、アンケート調査の各項目の結果が上向きに改善してきた。ホームページを通じて、学校の日々の運営状況が保護者に浸透し、「学校の見える化」が進んだ成果ではないかと考えている。

以下は、ホームページについて学校に寄せられた保護者の感想である。学校のベタな情報をホームページの更新という形で丹念に発信してきたことで、学校が身近な存在になり、学校への信頼感が高まってきたことを示しているように思う。また、学校での出来事に関する情報を学校と家庭で共有できることはホームページの特筆すべき効果だと思う。

<保護者の声>

- ・ ホームページの中に我が子の元気な顔を発見すると、とても安心する。
- ・ 父親は単身赴任で家を離れているが、離れていても我が子の学校生活の様子がよくわかり、とても助かっている。
- ・ ホームページの内容を通して、親子の会話の機会が増えてきた。
- ・ ホームページでモニタリングポストの放射線値をいつも確認できるので、とても安心である。
- ・ これまで、学校の敷居はとても高いように感じていたが、学校のホームページで大分イメージが変わった。
- ・ 子どもが学校の給食で何を食べているかがわかることは、とても有り難い。夕食の献立を決めるとき必ず参考にしている。
- ・ 宿泊訓練での活動の様子が現地からリアルタイムでアップされるので、自

分も子どもといっしょに参加しているような感覚がした。

毎日のブログ更新を積み重ねていくうちに、ホームページのある側面に気づいた。それは、ホームページが持つ学校経営、学級経営の記録的側面である。学校では、四季を通じて様々な教育活動が展開されているが、それを記録する校内システムがないと、すぐにうたかたの夢のように消えてしまう運命にある。

ホームページを更新するということは、校内のいろいろな出来事や児童の姿をホームページの中にデジタルデータとして保存することと同じであると考えている。

6. おわりに

伊達崎小学校は、1年8カ月の勤務であったが、小規模校にもかかわらず、その間10万件のアクセスがあった。内容は、肩肘を張らない、学校の普通のベタな情報をホームページ上で公開してきたことに尽きるが、それが保護者を中心とした読者のニーズにマッチし、ホームページから発信した情報が学校と家庭、地域の間でうまく循環できたからだと思う。1年8カ月の勤務の後半は、双方向的なホームページに高めるために、子どもブログ、読者の投稿ブログに力を入れた。児童会にホームページ委員会を作ったり、国語の作文や総合の授業にブログを取り入れたり、保護者からの投稿ブログも数多く寄せられた。学校のホームページがひとつの賑やかなコミュニティのようだった。

学校のホームページで東日本大震災による心の痛手や不安感を完全に払拭できたかどうか、評価は難しいところだが、ブログ形式の学校のホームページで学校と家庭、地域の関係がよくなり、現在よりも少しでも前に進もうという明るい兆しが見えてきたことは間違いなかった。

最後にここまで導いてくださった豊福晋平准教授をはじめとする国際大学GLOCOMの諸先生方に改めて感謝を申し上げたい。